郷土室だより

第162号
平成30年11月20日
編集・発行
中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電 話 3543－9025
刊行物登録番号 30-051

『江戸・東京の川＝中央区の川』(二)

前号では、東堀留川（堀江町入堀）の河岸と西堀留川（伊勢町堀）の水路の一部（「鍵の手」部分）が埋め立てられたことまで考察しました。今回は、西堀留川の埋め立てによって撤去された橋と河岸について見ていきます。図版は前号を参照して下さい。

◇震災後の復興事業で消失した水路

震災後の復興事業で、東堀留川が改修され、西堀留川も埋め立てられたことは『郷土室だより』第一六〇号で説明した通りです。

その結果、西堀留川があった街区は大きく変化しました。幹線街路の昭和通りが新設され、街並みが一新したのです。昭和通りは幅員が四四メートルあり、現在の江戸橋から地蔵橋（龍閑川に架かっていた橋）に至る区間は、全て新設。この復興事業では、「日本橋大通り（現・中央通り）の西側において三越を初めとして、永久的の大建築物があり（略）、大通りを拡張し得ない事情が昭和通りの新設計画となり、次いで西堀留川の埋築という順序となった」（『中央区史』）のです。

こうして、西堀留川は昭和三（一九二八）年に埋立が完了し、新設された街区の道路と市街地に組み込まれました。

◇堀に架かる橋

荒和布橋、中ノ橋、道浄橋、雲母橋が架かっていました。これらの橋について『東京府志料』（明治七年刊）で（『中央区史』も参考）見てみます。まず鍵の形に入る堀に架かっていた道浄橋と雲母橋は明治一九（一八八六）年の埋立で撤去、残る荒和布橋と中ノ橋も昭和三（一九二八）年の水路の埋立で撤去されました。

○荒和布橋　本船町より小舟町三町目へ架す。長さ一二間五尺三寸（約二三m）、幅三間半（約六・五m）。橋の辺海草の店多き故に名とす。

※日本橋川から伊勢町堀に入る入口に架かっていた橋。『御府内備考』に「海帯橋」。『江戸砂子』には「あらめ橋、六助橋とも云う。橋詰にてあらめ、わかめ等の海草を売るゆえのなり」、『新編江戸志』にも「江府のあらめ多く是より出る。その外海草軒とひとしく積おき商うなり。夏はところてん多く是より出るなりと見ゆ」とあります。

創架の年代は不詳とされ、昔は「思案橋」と呼ばれていたと伝えています。『承応江戸絵図』や『新添江戸之図』に「志あん橋」「志あんはし」とあり、『寛文新板江戸図』には「あらめはし」、元禄二（一六八九）年の『江戸図鑑綱目』以降は「あらめはし」とあります。『日本橋区史』には、明治九（一八七六）年六月の架替えで、長さ九間（約一六・四m）、幅が六間（約一一m）、石橋とあります。

○中ノ橋　伊勢町より小舟町二町目へ架す。長さ一二間（約二二m）、幅二間（約三・六m）。

※『寛文新板江戸絵図』に橋が描かれ、『安政六（一八五九）年再板尾張屋版切絵図』に「中ノ橋」とあります。また、『御府内備考』には伊勢町橋として「伊勢町側なれば名付」としています。

『橋梁一覧表』（東京府統計書・

明治一五年刊）に「木橋、長さ一二間（約二二m）、幅二間（約三・六m）、明治六年七月の架設」とあり、『日本橋区史』には「明治三八（一九〇五）年一一月の架替え、長さ九間（約一六・四m）、幅が六間（約一一m）、石橋」とあります。

○道浄橋　伊勢町にあり。長さ四間（約七・二m）幅三間（約五・五m）。昔此の所に道浄左衛門と云う人ありて、其の宅前の橋なりしか名とす。

※道常橋として、伊勢町堀塩河岸の東の方、堀の浮世小路の方に曲がる角の所にあった橋で、『正保江戸絵図』に橋が見えます。『江戸砂子』に「この所に道常というものありてかけたるよし。享保のころまで住しけるとかとあり、他に北条氏の臣池永有右衛門が、主家滅亡後江戸に出てここに住した」「道常はこの池永氏の名である。また伊勢橋とも称した」とあります。

『橋梁一覧表』では「木橋、長さ四間（約七・二m）、幅三間（約五・五m）、安政五年中架設」となっています。

○雲母橋　瀬戸物町にあり。長さ四間（約七・二m）幅一間四尺（約二m）。名義詳しならず。本名益田橋と云う。昔此の地の名主益田某の創建なればなり。

※『中央区史』に「きらず橋は伊勢町堀の鍵の手になった最も奥にあった橋で、名義は詳らかでない」としています。『正保江戸絵図』に橋が見えます。『新撰東京名所図会』（明治三三年刊）には「本名は益田橋といい、この地の名主益田氏の創架せしところなり」とあります。

『橋梁一覧表』では「木橋、長さ四間二尺（約八m）、幅四間（約七・三m）、明治一〇年一月架設」となっています。

◇西堀留川（伊勢町堀）の河岸

伊勢町堀は、日本橋地域のほぼ中央に位置する物流の中心水路。鍵形に西に屈曲した入堀北部の河岸は「伊勢町河岸」あるいは「塩河岸」、対岸は「裏河岸」と呼ばれました。また南部の東岸は「小舟河岸」、西岸は「米河岸」と呼ばれました。『東京府誌』（明治一一年編纂・以下『府誌』）にも「裏河岸は西の入堀の南岸、塩河岸は西の入堀の北岸、米河岸は東の河岸」とあります。

これらの河岸には、乾物・穀物を中心に全国から集まる諸種の物資が荷揚げされ、それを収める蔵がぎっしりと建ち並んでいました。『江戸名所図会』にも米河岸・塩河岸沿いに蔵が建ち並ぶ様子が描かれています。

◇伊勢町河岸（塩河岸）

鍵形に屈曲した水路は室町三丁目の地先で堀留まり、水路に沿って北側に本町三丁目裏河岸と伊勢町、堀留一丁目が並びます。

『御府内備考』は「塩問屋があったので塩河岸と称した」としています。『承応江戸絵図』に「しほ丁」、『新添江戸絵図』には「しほヤ丁」とあり、『江戸名所図会』では「道浄橋の東に塩河岸」とあります。

明治一〇（一八七七）年九月二八日に、道浄橋より以西、堀留までの河岸地の南岸を「南塩河岸」、北岸を「北塩河岸」と正式名称が付きました。

○室町三丁目

室町二丁目の北側に続き、現在の日本橋室町二丁目にあたります。東側には伊勢町堀の堀留に突き当たる横町、浮世小路があります。呼び名は、『武江図説』に「此の所に畳表浮世臥座のみせあったため、またここに浮世風呂屋があり遊女が多かったため俗称された」とあります。

また『延宝江戸方角安見図』には「うきよしやうじ」とあり、「しやうじ」は加賀国の方言。江戸の初期に加賀出身の者が加賀笠を売っていたことから呼んだとされています。

嘉永四（一八五一）年の諸問屋再興『諸問屋名前帳』（以下『名前帳』）に小間物問屋二軒、本両替屋・両替屋・下り蝋燭問屋・住吉組荒物問屋・薬種問屋・春米屋が各一軒とあり、『新撰東京名所図会』には天臣堂医院、三友倶楽部、村井兄弟商会東京支店、諸新聞雑誌広告取次及び煙草販売店の一貫

商会、洋服地並和洋釦類の丸上商店、薬種店の資生堂、平沢薬種店、島田薬種問屋、果物洋酒玉子類の千疋屋、紙業の萬屋、久能木茶問屋、旅宿の名倉屋本店、洋酒食品販売の合資会社大黒社、牛肉料理店の吉川、鰻蒲焼料理店の丸喜などの名前が見えます。

室町三丁目一円は、関東大震災後の帝都区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に室町二丁目に改称されました。

○本町三丁目裏河岸

室町三丁目の東、伊勢町堀の北岸に位置する片側町。現在の日本橋本町一丁目にあたります。明治二（一八六九）年四月に、室町三丁目に合併されました。

『名前帳』には、炭薪仲買問屋が二軒とあります。

○伊勢町

本町三丁目の東に位置し、水路沿いに一番地から一三番地まで続き、現在の日本橋本町一・二丁目にあたります。

町名の由来は「伊勢から移住した人の住んだ為」とか「北条氏政の弟氏村が小田原滅亡の後出家し伊勢氏を称して此処に住み、其子の善次郎が此処で名主となったのにちなむ」と云います。また北部を「塩河岸」、東の一部を「米河岸」と唱え、この両河岸が西堀留川をはさんで、全国から来る物資（主に乾物穀物）の荷揚場であった（『新修日本橋区史』）。『名前帳』の問屋数は、後述の「米河岸」を参照して下さい。『新撰東京名所図会』に木綿呉服商店の塚本合名会社、真綿打綿問屋の奥州屋、織物商店の正田屋、木綿商の萬茂商店、八王子織物取次商店、太物商店の伊勢屋、絵具・染料・乾物・薬物問屋の半田屋、絵具・染料・線香・生渋問屋の大坂屋、薬種店の萬惣、薬品・薬物・線香類販売の平田商店、醤油問屋の中條商店、関根砂糖問屋、生蝋・白蝋・魚油・燐寸問屋の和泉屋、保田運送店、内国通運㈱伊勢町出張所、第二十銀行、旅館の喜根屋などで、繊維関係や薬種関係の名前が見えます。

伊勢町二六～二八番地は、関東大震災後の帝都区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に室町二丁目、残りの伊勢町の一部一～一一番地（米河岸の一部を含む）は本町一丁目に、北大部一二～二五（米河岸の一部を含む）は本町二丁目に改称されました。

○堀留町一丁目

伊勢町の東に位置する片側町。南は伊勢町堀の堀留まり。八町河岸の一つ。現在の日本橋本町二丁目、日本橋堀留町一丁目、日本橋小舟町にあたります。

『寛永江戸図』に「六十間河岸」、『新添江戸絵図』には「六十間丁」、『延宝江戸方角安見図』では「ほりどめ」とあります。

また『江戸買物独案内』（文政七・一八二四年刊）には紙問屋・諸国茶問屋・線香問屋の湊屋源三郎、煙草問屋の湊屋仁左衛門、諸国茶問屋・醤油酢問屋の長崎屋、結納鰹節干肴所の川村庄左衛門、乾物問屋の川村十兵衛、畳表問屋の清水屋、煙草問屋の丹波屋、醤油酢問屋の横田屋の名前があります。

『名前帳』の問屋数は一四軒で、河岸八町米仲買二軒の外は、関東米穀三組問屋・雑穀為登組・茶問屋・肴問屋・炭薪仲買・両替屋・下り水油問屋・水油仲買・紙問屋・薬種問屋・住吉組荒物問屋・瀬戸物問屋が各一軒とあります。

堀留町一丁目の一円は、関東大震災後の帝都区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に本町二丁目に改称されました。

◇伊勢町裏河岸

伊勢町河岸（塩河岸）の対岸。河岸地沿いには瀬戸物町と伊勢町と並びます。『寛永江戸図』では「いせ町うらかし」としています。

○瀬戸物町

伊勢町堀の南岸、室町二・三丁目の東に位置する両側町。南は小田原町、東は伊勢町に接し、魚河岸と室町の繁華街に接する場所に位置し、現在の日本橋室町一・二丁目、日本橋本町一・二丁目にあたります。町名の由来は、『新撰東京名所図会』に「尾張国春日井郡瀬戸村（現・愛知県瀬戸市）産の陶磁器を扱う水野兵四郎・大原某ら六軒の店があったことによる、今はこれ等の瀬戸物店はなし」とあります。

江戸の初期には、瀬戸物商の多い所と知られていましたが、後には魚河岸の外郭の一部を形成して、魚問屋の多い町へと変化して

います。寛文三（一六六三）年に、備前屋与兵衛が山田屋八左衛門（本町）・大津六左衛門（駿河町）らと三都一三人の仲間を結成し、専業の町飛脚問屋（※）を興しています。

※町飛脚問屋　毎月三回の東海道定期便、江戸・大坂間の金銀通送の金飛脚を開始した。この時期以前は、専業の飛脚問屋が少なく、多くは関西（京都・大阪）と江戸の物資廻漕便に依存していました。天明二（一七八二）年に伏見屋と島屋が組合を結成（九名）して、幕府公認の定飛脚問屋となっている。

『江戸買物独案内』には鰹節・塩干肴問屋の伊勢屋伊兵衛（にんべん）、乾物問屋の伊豆屋、船積住吉組奥州筋丼石巻・乾物問屋・石灰問屋・絵具染草問屋の伊勢屋、御前海苔所紀州・尾張御用の久保田儀左衛門、醤油酢問屋・絵具染草問屋・線香問屋の万屋、丸藤問屋・絵具染草問屋の湯浅重左衛門、諸国銘茶所青雲軒の伊勢屋、生蝋燭問屋・卸小売の越後屋などの有力商人の名前のほか、鼈甲櫛笄所・生地板・銀粉細工の保根屋、木綿類・地染手拭問屋の房州屋、刷物・千代紙・絵半切問屋文化堂の塩屋などの名前も見えます。また、『延宝方角安見図』に「くだものいろいろ」とあり、水菓子屋があったことが分かります。

文化一〇（一八一三）年の『江戸十組問屋便覧』（以下『便覧』）に問屋数は二二軒。肴問屋二軒、下り鰹節問屋と乾物問屋が各一軒、住吉組荒物問屋三軒、炭薪仲買五軒、竹木炭薪問屋一軒、春米屋二軒、両替屋・版木屋が各二軒、茶問屋・笘問屋・雛問屋が各一軒。また『名前帳』の問屋数も同じ二二軒で、肴問屋二軒、下り鰹節問屋・乾物問屋が各一軒、住吉組荒物問屋三軒、炭薪仲買五軒、竹木炭薪問屋一軒、春米屋二軒、両替屋・版木屋が各二軒、茶問屋・笘問屋・雛問屋が各一軒で、『便覧』とあまり変化が無いことが分かります。

『新撰東京名所図会』に呉服商店の東国屋、絵具染料商店の桂屋、岡本薬種問屋、絵具染料問屋の半田屋、洋酒・絵具染料・薬種問屋・西洋小間物商の勉強堂、吉野生糸商店、鰹節商店の伊勢屋、酒店の伊勢利屋、高津度量衡器販売店、運送業の三立社、東京穴蔵大工職業組合事務所、日本生命保険株式会社東京支店、日本海陸保険会社出張所、寄席の伊勢本の名前が見えます。

瀬戸物町は、関東大震災後の帝都区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に東一部六～一五番地は本町一丁目、北大部一二～二五番地（米河岸の一部を含む）は本町二丁目に改称されました。

○伊勢町

瀬戸物町の東に位置し、水路沿いに一三番地から一七番地と続き、西側で米河岸に接しています。現在の日本橋本町二丁目。

『名前帳』の問屋数は「米河岸」を参照して下さい。『新撰東京名所図会』には生蝋・白蝋・魚油・燐寸問屋の和泉屋、真綿・打綿問屋の奥州屋、小西絵具店と旅館の喜根屋の名前があります。

◇米河岸

伊勢町堀の西側、伊勢町・本船町が続きます。『延宝江戸方角安見図』に、江戸橋際の日本橋北岸と小網町一丁目の河岸地に「こめがし」とあります。俗に米河岸と呼ばれた河岸地の名称は、常陸国小田城城主小田天庵の末孫主従が移住してきて、その家老高瀬善兵衛が主家の仕官運動中に米穀商を営んだためと伝えています。

堀沿いの河岸地には米問屋の白壁の倉が並び、『西鶴置土産』には「伊勢町の大盃といえる大じん」「月夜の利左衛門といえる大臣」などとあり、河岸地の商人たちの生活ぶりが分かります。明治一〇（一八七七）年一〇月二〇日に、荒布橋より以北道浄橋までの河岸地が、「米河岸」と正式名称になりました。

『日本橋区史』の「河岸地名称表」に、米河岸として「河岸番号一号乃至一六号は所在地が本船町一九乃至二五番地先、同一七号乃至四一号は同伊勢町一乃至一〇番地先」とあります。

○伊勢町

伊勢町堀に沿う片側町。八町米河岸の一つで、西で瀬戸物町・小田原町二丁目・長濱町、南では本船町と接しています。現在の日本

橋本町一・二丁目にあたります。

『江戸総鹿子名所大全』には米問屋が集中し毎日相場が立ち、米・油・綿など諸色問屋の内田市左衛門・山口作兵衛・とたんや清兵衛・かまくらや市兵衛・丸屋久右衛門など大店の名前が見えます。また『江戸買物独案内』にも、奥川筋船積問屋の高橋屋、鼈甲朝鮮生地板問屋・小間物問屋の木屋、諸国茶・醤油酢・明樽問屋の中条屋、下塩仲間問屋・明樽問屋の永楽屋、醤油酢問屋の田中屋、蝋問屋の大津屋、麻苧問屋の奥州屋、絵具染草・線香・丸藤問屋の伊勢屋、線香・絵具染草問屋の半田屋、下り傘・畳表問屋の繁本屋、竹皮問屋の酒井屋、唐和薬問屋の大和屋、線香・絵具染草・丸藤問屋の熊野屋など名前があり、大店が集まっていたことが分かります。

『名前帳』に問屋数は四四軒で、そのうち河岸八町米仲買五軒・地廻米穀問屋一軒・脇店八カ所組問屋一軒・舂米屋二軒と米関係問屋が九軒。ほかに下り水油問屋二軒・地廻水油問屋一軒・伊豆油仲買二軒と水油関係が五軒。住吉組荒物問屋六軒、茶問屋・炭薪仲買が各三軒、呉服問屋・小間物問屋・六組飛脚屋が各二軒、乾物問屋・糖問屋・木綿問屋・糸問屋・繰綿問屋・紺屋・下り蝋燭問屋・地廻蝋燭問屋・暦問屋・版木屋・瀬戸物問屋・番組人宿が各一軒となっています。

『新撰東京名所図会』には真綿打綿問屋の奥州屋、小西絵具店、生蝋・晒蝋商店の大津屋、熱田薬種店、中島薬種店、平沢薬種店、後藤砂糖問屋、料理店の伊勢勝の名前が見えます。

○本船町

『郷土室だより』第一五八号を参照して下さい。

◇小舟河岸

堀留町一丁目の南側から小舟町（一丁目～三丁目）の西側に位置し、西堀留川沿い一帯の河岸地。一丁目は一八七坪八五、二丁目は四六九坪、三丁目は四一坪四ありました。

寛永の頃は「あえもの河岸」と呼ばれ、『寛永江戸図』に、西堀留川の西側に「こふな丁」、同二丁目の東側には「あえものかし」とあります。

小舟河岸は名前の通り、舟の出入りした町。江戸湊の中心に位置し、江戸から明治・大正と問屋が軒を連ねていた町です。廻漕問屋、鰹節塩干魚問屋・荒物乾物海草問屋・畳表問屋・砂糖問屋・団扇問屋・錦糸・綿布問屋などが軒を並べ、それらの代表的問屋がここに集まっていました。なかでも錦糸・綿布問屋はここが主力をなし、錦糸の斎便、丸紅東京店、岩友、柿沼などが、大正時代の屈指の店だったと言われています。

明治一一（一八七八）年六月六日に、荒布橋より以北道浄橋までの河岸地が「小舟河岸」の正式名称になりました。

『日本橋区史』の「河岸地名称表」に、小舟河岸として「河岸番号一号乃至一五号は所在地が小舟町三丁目一乃至一一番地先、同一六号乃至三二号は同小舟町二丁目一乃至一一番地先、同三三号乃至四五号は小舟町一丁目一乃至八番地先、同四六号乃至五一号は堀留町一丁目一乃至四番地先」とあります。

○小舟町一丁目

伊勢町堀の東岸に沿う片側町。北から一丁目から三丁目と南に続きます。現在の日本橋小舟町にあたります。小舟町一帯は、慶長八（一六〇三）年の町割以後は下舟町と呼ばれていましたが、享保五（一七二〇）年に、小舟町と改称。本船町に対する町名とされています。

『寛永江戸図』に、伊勢町堀の西側河岸地に「小ふな町」・「同二丁メ」とあります。そして『承応江戸絵図』では東側河岸地に移り、三丁目の場所に「小舟丁」、二丁目の場所が「あい物かし」とあり、『寛文新板江戸絵図』以降北から一～三丁目と並ぶようになりました。

小舟町は、堀江町や伊勢町などとともに八町河岸の一つとして、有力商人たちが店を構え蔵を並べていました。河岸地には船積問屋が集まり、鰹節干肴問屋も多いことから「鰹河岸」とも呼ばれました。『府誌』に、鰹河岸「伊勢町堀の東岸を云う。日本橋の魚市と相隣り鰹節問屋多ければなり」とあります。

『江戸買物独案内』には奥川筋船

積問屋の錠屋・金屋らの有力商人の名前があり、ほかに鰹節塩干肴問屋や下り傘問屋・畳表問屋・菅笠問屋、油商人らが集まっていました。こうした有力問屋の間に、茶・麻苧・海藻・明樽・絵具染草・釘鉄銅物・唐和薬種などの店が軒を連ねていました。『便覧』にも問屋数二七軒のうち、奥川筋船積問屋五軒や畳表問屋・下り傘問屋各四軒、蕨縄問屋・水油仲買各二軒、鰹節問屋・明樽問屋・線香問屋各一軒、その他七軒とあり、小舟町の問屋街の様子が分かります。

『名前帳』の問屋数は二八軒。内訳は河岸八町米仲買六軒、地廻米穀問屋四軒、関東米穀三組問屋三軒、脇店八カ所組問屋三軒、雑穀為登組一軒、春米屋二軒とあり、米関係の問屋が多いことが分かります。他に乾物問屋三軒、下り鰹節問屋一軒、堀留組畳表問屋二軒、住吉組荒物問屋・下り蝋燭問屋・薬種問屋が各一軒とあります。

『新撰東京名所図会』には、細糸紡績㈱、日本洋紙合資会社、織物商の久保田喜右衛門、洋糸商の平沼八太郎、乾物商の鳥居立之助、荒物商の鈴木熊右衛門、回漕業の静岡屋、砂糖問屋の金子秀次郎、貸席の原新三郎の名前があり、明治期には業種の変化があったようです。

小舟町一丁目（小舟河岸の一部を含む）の一円は、関東大震災後の帝都区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に小舟町二丁目に改称されました。

○小舟町二丁目

小舟町一丁目の南に続きます。現在の日本橋小舟町にあたります。東岸の河岸地は「醤（あいもの）河岸」とも呼ばれ、『承応江戸絵図』に「あい物かし」とあります。一丁目との間から対岸の伊勢町へ中ノ橋が架かります。

『江戸買物独案内』に奥川筋船積問屋の竹村屋、水油仲買の丸屋、線香問屋の伊勢屋などの名前。『便覧』に問屋数一三軒で、鰹節問屋が六軒、奥川筋船積問屋・下り傘問屋が各二軒。他に生布海苔・水油仲買・その他各一軒です。『名前帳』には問屋数が一一軒で、下り鰹節問屋が三軒。他に住吉組荒物問屋と下り水油問屋・地廻水油問屋・水油仲買・魚油問屋が各一軒あり、糖問屋・春米屋・両替屋が各一軒となっています。

『新撰東京名所図会』に鰹節海産商の籾山商店、鰹節問屋海産商の加島屋、晒布海苔其他問屋の平田善八、麻布荒物商の村田定吉、銅鉄商の鉄屋、水油石油問屋の小倉常吉、職工薬品販売商の村松清吉、信濃銀行東京支店の名前が見えます。

小舟町二丁目の南半八の一～一五（小舟河岸の一部を含む）は、関東大震災後の帝都区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に小舟町一丁目に改称されました。

○小舟町三丁目

小舟町二丁目の南に続きます。現在の日本橋小舟町にあたります。小網町一丁目との間の東西の横町は、照降（てりふり）町と俗称されていました。二町足らずの通りに、雪駄屋と下駄屋が軒を並べていたことから付いたものです。南端には本船町へ渡る荒布橋が架かります。

『江戸買物独案内』に鰹節塩干肴問屋の尼屋・遠州屋、乾物生布海苔・苧屑切問屋の大坂屋、綿打道具問屋の大坂屋、水油問屋の植村屋、水油仲買の緒川屋、麻苧問屋の白子屋、薬店の大坂屋などの名前。

『便覧』に問屋数が一八軒。鰹節問屋が三軒で、下り塩問屋・水油仲買・綿打道具問屋が各二軒。他に明樽問屋・麻苧問屋・水油問屋・下り傘問屋・下り蝋燭問屋・線香問屋各一軒、その他三軒。また『名前帳』には問屋数が七軒で、肴問屋が二軒、下り鰹節問屋が一軒、他に下り水油問屋・地廻水油問屋が各一軒と炭薪仲買・両替屋が各一軒とあります。

『新撰東京名所図会』に砂糖商の小林弥兵衛・栗林幸助、鰹節問屋兼海産商の渋谷仙之助、乾物雑穀商の渋澤亀吉、西洋織物其外商の米倉屋、鉱物業の高橋芳兵衛、國光石油㈱販売店、ラム販売合資会社、安田銀行と、小舟河岸に第三銀行の名前があります。

小舟町三丁目の一円（小舟河岸の一部を含む）は、関東大震災後の帝都区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に小舟町一丁目に改称されました。

次号は箱崎川を予定しています。

（菅原健二）